

# みんぱく

月刊

国立民族学博物館編集



特集

「未来へひらくミュージアム」  
ミュージアムとTのいい関係  
見せる—絵空事と遊び心



## 花で伝える伝統文化

●池坊 由紀

そのシンプルな生花の前になぜか大勢の人が集まっていた。台湾でのデモンストレーションが終わった時のことだ。デモンストレーションでは通常、一時間から一時間半の中で二〇作程度、大中小さまざまないけばなをいけ、披露する。内容も古典的なものから、現代的なものなど多彩だ。その時もういろいろいけたのだが、この種類の花材しか使っていない、しかも本数も決して多くない生花がこれほど人気だとは、意外だった。

海外でいけばなのデモンストレーションをする場合は、いろいろなことに気を遣う。まず使う草木の種類が日本ほどは、多く手に入らない。花屋さんはまさしく花屋さんであって、いけばなにとつて重要な枝や葉には不足する。いけばなの美意識は、花と共に葉を見て美を感じるところから始まっている。緑という、どんな色にも合う、どんな形にも合う万能の存在があつてこそ、はじめて花が生かされ、また共に用いることによつてそこに美しい対比が出来、世界が深まるのだ。従つて、花屋さんに葉がないなら野山に分け入つて採つてきたりもする。

また海外の方に親しみを抱いてもらえるような工夫も必要だ。日本の花を持つてきて日本からの器を使つていけるだけでは、ショーとして楽しく印象的であつても、では自分たちがやつてみようという意欲には結びつきにくい。むしろその行く先々にある花で、時には器などもそのこの特産の焼き物や漆製品等を活用していく。その国の民族性、宗教性や生活環境を尊重しながら無理のない方法でいけばなならではの美意識や哲学を理解してもらおう。が時としてその思いが強くならずして反省することもある。盛り沢山のフラワーアレンジメントに雰囲気に近い、いけばな作品が好まれるだろうと勝手に推察していたことがあった。が実際は、古典的な作品が好まれた。表面的なことだけを似せても繕ったことはすぐに見抜かれてしまう。

各々の国が各々の自然環境の中で育んできた文化や伝統があり、それを誇りにしているように、日本人は日本の文化や伝統をゆがめることなく伝えていかなくてはいけないのだろう。相手を理解しようと努め、心を寄り添わせることと、中途半端に表面的に相手に迎合することは、全く異なるのだ。私たち日本人がいかに正しく澄んだ心で日本を捉えられているか、そしてその像をどのような形で海外に発信出来ているのか、一枝一枝挿すたびごとに問われているような気がしてならない。

\*池坊いけばなには、立花(りっか)、生花(じょうか)、自由花(じゆうか)の様式があり、生花は草木の出生を重んじ(三つ)の核で構成する。



イラストレーション：栗岡奈美恵

## 目次

## CONTENTS

- 01 エッセイ 世界へ世界から  
花で伝える伝統文化  
池坊由紀
- 02 特集 見せる  
—— 絵空事と遊び心  
目眩まされ、騙られる快感  
笹原亮二  
不思議の幻術  
—— 「放下」に惚ける  
上島敬明  
祭礼つくり物  
—— 熊本城下の雨乞い  
福原敏男  
寛容な客  
—— 二世者の芸能史にむけて  
真鍋昌賢
- 08 未来へひらくミュージアム  
ミュージアムとITのいい関係  
高田浩二
- 11 表紙モノ語り  
コートジボアールのカフェ  
川口幸也
- 12 みんなくインフォメーション  
友の会とミュージアム・ショップからのご案内
- 14 万国津々浦々  
一本の旗  
—— アチエからのメッセージ  
山本博之
- 15 人生は決まり文句で  
六畜興旺(リュウツーシンワン)  
野林厚志
- 16 手習い塾  
モンゴル文字で名前を書く①  
藤井麻湖
- 18 地球を集める  
ルーロットとの出会い  
大森康宏
- 20 生きもの博物誌  
マガール民族楽器のいのち  
南真木人
- 22 見ごろ・食べごろ人類学  
手作りトラックから見る  
タイ社会  
森田敦郎
- 24 人間文化研究機構第2回 公開講演会・シンポジウム  
「歩く人文学  
—— 人文学と社会の新しい関係」  
次号予告・編集後記

# 見せる

## 絵空事と遊び心

つくり物の世界と本物の世界の区別がつかないほど、技術が発達してきた現代の娯楽産業。しかし、空とぶ絨毯をつるす糸が見えてしまっていたころの映画に、いまだに魅せられるのは、単に懐旧の念だけで説明できることではないかもしれない。現実とのずれを見せる芸、虚構であることを知りつつ楽しむ余裕。そんな騙し・騙されのゲームは、遊び心を共有することによって成立する。絵空事との付き合い方について考える。



京都の六畜念仏で演じられる獅子。重ねた基盤の上の上のっている



まつりに興を添える見世物小屋。山形にて

## 目眩まされ、騙られる快感

菅原亮二(さきはらりょうじ) 民族文化研究部

子どものころ、興味津々だったものがある。ひとつは怪獣映画。長い休みの前に学校で配られる割引券を毎回きちんと消費するのが家の常だった。もうひとつは見世物小屋。近所の薬師堂の緑日には必ず見世物小屋が出た。毎年親に連れられて出かけたが、実際にはかに入っただけ、少し大きくなって一人で行くようになってからだった。このふたつ、ぼくのなかでは実はつながっていた。怪獣映画といっても今のようにCGなんて使わない。流行のギャグを真似たり膝で四足歩行をしたり、いかにもなかに人が入っているのがわかる代物だった。見世物にしても映画会社が作った現代のお化け屋敷にはほど強い。キッチュな看板を掲げた薄暗い小屋のなかで、人がこそぞ動いているといった具合だった。ぼくは当然ながら、いすれもまったくの本物とは思っていなかった。かといって、子どもだましの嘘と醒めていたわけでもない。毎回出かけては映画館や小屋のなかでめくるめく時を過ごし、見た後は充実感に満たされていた。確かにぼくは、そこで演じられる怪獣や異形の人びとが登場する虚構の世界に夢中になり、それとの遭遇を楽しんでいた。

こうしたぼくの嗜好は、せつせと獅子舞見物に出かけている今もあまり変わっていない気がする。各地では実にさまざまな獅子を目にした。猫のようにじやれる獅子、振袖姿で男に恋い焦がれる獅子、碁盤上で逆立ちする獅子。さまざまに趣向を凝らした獅子に出逢うという見入ってしまう。どれも人が演じていることは百も承知だが、演者たちは思いも寄らない身体用の用い方でこの世ならざる聖獣を出現させる。それがぼくの日と心を奪ってしまう。改めて考えてみると、こうした事態は見物という行為には大なり小なり付き物なのに気づく。芸能しかり、見世物しかり、祭りのパレードしかり。さらにそれは、視覚に限らず聴覚、即ち話芸や物売りなどの言葉の世界にも及んでいる。ぼくらはそこで見せられ、騙られたことを、レミカで絵空事と了解しつづもつ魅せられてしまふ。なぜそれを享受するのか。そこは、平素馴染みの身体や物品や言葉をあえて用い方を変えることで、日常とは異なる世界が出現する。その変化の鮮やかさにはぼくらの普段の意識や感覚のありようが揺るがされ、世知辛い現実から瞬自由になる



歌舞伎で有名な「お夏満十郎」を演じる獅子物

浮遊感や開放感を感じるからかも知れない。目眩まされ、騙られる快感とでもいおうか。しかし、絵空事だからといって侮るなかれ。この種の快感に人は陶醉し、時として規則や秩序に統御された現実世界の否定へと駆り立てられる。古今東西を問わず、時の権力が芸能に神経をとがらせ、ことあるごとに抑圧してきたのは、見物のこうした性向とたぶん無関係ではない。肝心なのは、あくまで絵空事は絵空事として遊び楽しむこと。それは昨今話題の仮想現実にも通じるような気がする。

# 不思議の幻術

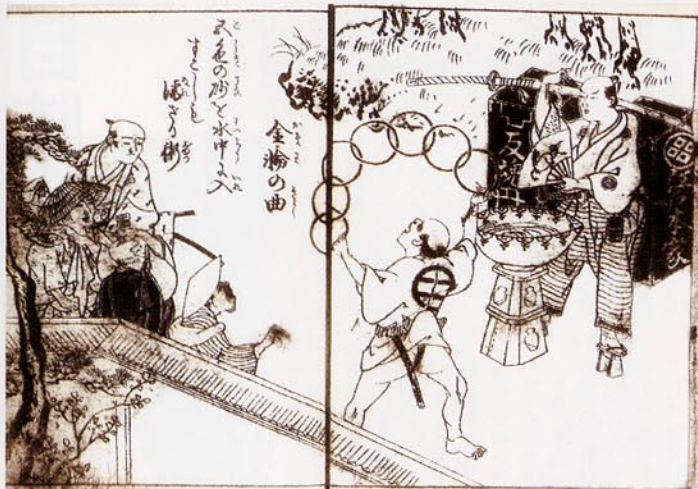
「放下」に惚ける 上島敏昭 (かみじまとしあき)

大衆芸能研究家



【七十一番職人歌合】  
〔新日本古典文学大系〕61 岩波書店刊  
より、「ほうか」

「放下釜」平瀬輔世著(宝暦14年(1764)刊)国立国会図書館蔵



「放下釜」平瀬輔世著(宝暦14年(1764)刊)国立国会図書館蔵

考えてみれば、手品というのはほんな芸能だ。手品師は騙しのプロで、客はそれを承知で騙されて大喜びする。また、そこには必ず種があるのに、手品師は決してネタバラシなどしない。なんとも客をコケにした芸能だ。そんな手品のどこに、私たちは魅力を感じるのだろうか。

もともと、ネタバラシは厳禁というのは、あくまでも建前。実際には、昔からたぐさんの手品の種本が発行されてきた。その代表的な一冊に「放下釜」がある。放下とは、手品の、当時の呼称である。しかし、中世以来の芸能ジャンルとしての放下は、もちろと広義で、毬や棒、刀などを投げる、現在のジャグリングを中心に、手品ばかりか歌までも含むものだった。いくつもの玉を投げ分けたり、トリックで目を眩ませたり、節おもしろく歌ったりして、人間業とは思えない不思議を現出する芸能、それが放下だつた。

富山県の民謡「こきりこ」の源流も放下で、「七十一番職人歌合」に描かれた「ほうか」は、こきりこを打ち鳴らしている。腰にさした柄杓は布旗や投げ銭を受け取るため、また、七夕飾りのような旗を背負っているのも特徴である。能の「岡田川」や「三井寺」では、狂女が篋を持って登場する。これを狂篋といひ、狂気のシンボルとされる。

狂は芸能と縁が深い。細川涼一は「逸脱の日本中世」で「芸能者そのものが狂者と見られ、「村を離れて流浪し、場所柄をわきまえず道にあくが

れて歌舞するものを「狂」と見るのが、中世日本の狂気観であった」と書く。つまり、広義のマジシャン「放下師」は、生活不適格者として社会から締め出された存在であった。

そしてたびたび彼らが社会の内に入ると、危険な存在として恐れられ、排除された。たとえば、泡坂妻夫「大江戸奇術考」では、キリシタンの残党として磔刑にされた市橋庄助と島田清庵、それに奇怪な幻術を用いたとして死刑に処せられた生田中務らの名前を挙げて、また、井原西鶴の最後の作品「西鶴織留」に「我が朝の果心居士。これらが技術の法は乱のも」と記された伝説のマジシャン・果心居士には、信長や秀吉と対決したとの伝承があり、いくつもの小説に題材を提供してきた。

なぜ彼らが、世の中を乱すと断定され、権力者の怒りにふれたのか。それはいうまでもなく、権力者からくりが手品の手口そのものだからだ。つまりこの社会は、権力者が主宰するマジックショーであり、そこでは権力者こそが手品師。ネタバラシなどされたら、その途端に現実がひっくり返ってしまう。これは手品師は権力者の目を逃れ、社会を離れて流浪するしかあるまい。

私たちが手品に楽しさを覚えるのは、社会から落ちこぼれた手品師に身をまかせることで、私たちが呪縛する社会の常識から精神を解き放ち、権力や現実原則から自由になった桃源郷に、しばしのあいだ遊ぶことができるからなのだ。

# 祭礼つくり物

## 熊本城下の雨乞い

福原 敏男 (ふくらはとしお)

日本女子大学教授

都市祭礼の楽しみのひとつは、そぞろ歩きしながら、町々が出した趣向を凝らしたつくり物を見較べることにあろう。街の鎮守に奉納され、見物者の目を喜ばせるために美しく飾り立てられたつくり物。都市では複数集団が対抗するため、つくり物の趣向競争はエスカレートし、その華やかさは村まつりとは全く別種のものとなる。見物者をあつといわせるつくり物を毎年つくり替えては展示し、または行列し、終わつたら流し、焼きすてることもある。その根底には、「風流」(ふうりゅう)という一回性、流线性、意外性の美意識が流れている。

一見危機に瀕する儀礼と考えられる真剣な雨乞いにおいてさえ、祭礼つくり物の世界が横溢する事例は数多い。たとえば、江戸時代の熊本城下では雨乞いの練物(つくり物、仮装、囃子の行列)が毎年のようにおこなわれた。早魃の恐れがあると各地から雨乞いに因んだつくり物を出し、春日の横手村(現熊本市横手)を先頭に行列をつらねて熊本城下を練り歩いた。同村では雨乞い祈願の際、縄を巻き付けた梵鐘をいったん池に沈めて引揚げるところから、雨乞い行事自体を「鐘巻」とよぶ。肥後の地誌「肥後国誌」によると、早魃の年、横手村手水と田崎

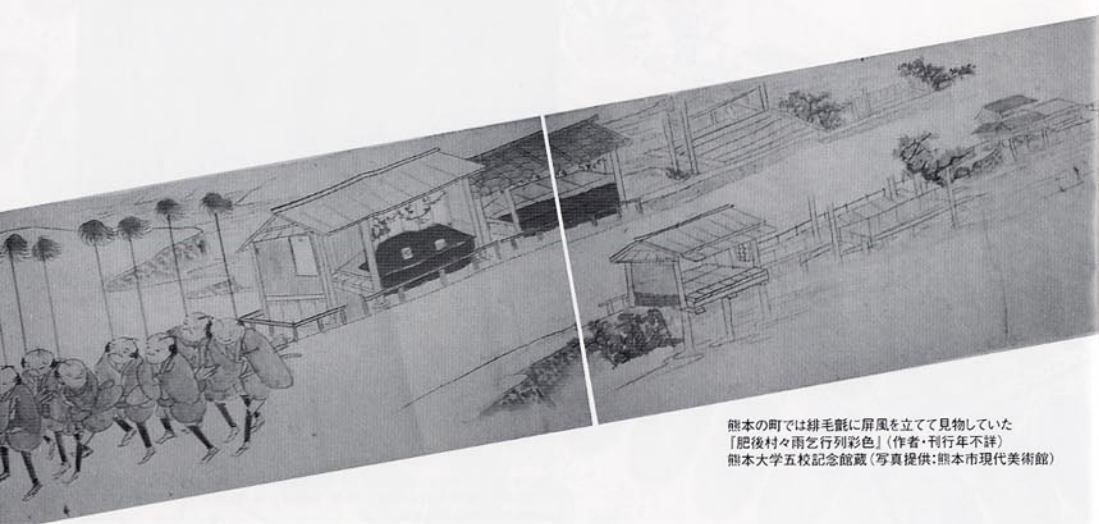
村では女面の蛇身が鐘にまといつたつくり物を出して囃した。権道村からは夥しい仮装の山伏を出して鐘手の鐘を調まわし、田崎村の農夫が蛇の止めを刺す所作をし、鐘とともに淵に沈めると験があり雨が降った、とも伝えられる。天保年間(一名所・名物東肥名寄)によると、この雨乞いに各地より出される比丘尼、坊主、唐辛子、山伏、大名行列などのつくり物が有名であり、一七八〇年までに五八回も「鐘巻」が出たという。この行事を描いた『肥後村々雨乞行列彩色画』全一七巻(熊本大学五校記念館蔵)や『鐘巻雨乞全略図』(国立歴史民俗博物館蔵)は実に興味深い。後者は一八四四年夏雨の「雨乞行列之図」を一八七三年七月に久瑠堂が再版行したものであるが、その代表的な出し物(括弧内)を記す。

横手村の狸々は中国伝来の酒好きの靈獣で能や歌舞伎舞師を媒介にして、祭礼風流に好んで採り入れられた。御寺領村(験者が数珠をもつて鐘を念じる)、田崎村と権田村(雷神)、久末村と阿弥陀寺村(竜王)、荒尾村(竜神)、今村(竜神珠取り)、十三村(宝珠と団扇)、二本木村(鐘巻)は、竜にまつわる雨乞いイメージのつくり物である。権藤村(屋台の天狗人形と大法螺貝)と苅草村(天狗面)は山伏と験力に関するつくり物、戸坂村(忠臣蔵狐師の助平)、田崎村(小野道風)、嶋村(大木根と頼光の鬼退治)、土川原村(相合傘)、池端村(蟹)、

熊本本の町では緋毛氈に屏風を立てて見物していた  
『肥後村々雨乞行列彩色』(作者・刊行年不詳)  
熊本大学五校記念館蔵(写真提供:熊本市現代美術館)

# 見せる

——絵空事と遊び心

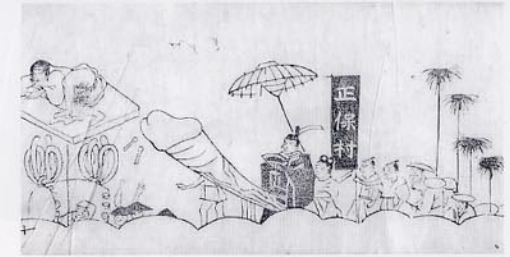


上白石村(糞亀)は芝居、文芸、瑞光のつくり物であろう。最後の正保村(大名行列)も近世の都市祭礼にはお馴染みの風流である。現実の大名行列の直の写し、または歌舞伎の奴振りなどのフィルタを通して祭礼行列になったものなどさまざまなケースがある。

なかでも、とりわけ異様なのは濱口村(神主と巫女の乱交)である。同じ濱口村の出し物(精力が雨を呼ぶ趣向)でも「肥後村々雨乞行列彩色画」と「鐘巻雨乞全略図」は、出た年によって違いがあるのか、絵師によって表現が異なるのか、図のように異なる。毎年恒例の祭礼におけるつくり物ならば藩による風俗の検閲もできようが、臨時の祝祭では規制が行き届かなかったのであろう。祝祭につきものの「日常の逆転」(聖職者の墮落)が現状(早魃)打破を呼び込むという連想を喚起するものであろうか、まるで目眩ましにあつたようである。



清姫が鐘に取り付いているつくり物「肥後村々雨乞行列彩色画」(作者・刊行年不詳)熊本大学五校記念館蔵(写真提供:熊本市現代美術館)



濱口村の出し物(神主と巫女の乱交)は日常の逆転(聖なるものの墮落)を演出上「肥後村々雨乞行列彩色画」(作者・刊行年不詳)熊本大学五校記念館蔵(写真提供:熊本市現代美術館)  
下「鐘巻雨乞全略図」(明治6年(1873)刊)国立歴史民俗博物館蔵

# 寛容な客——二七者の芸能史にむけて

真鍋 昌賢 (まなま 昌よし)  
大阪大学助手

寄席に客をいかに引き込むのか。いや、もっと正確に言うならば、通りすがりの客をいかに客に変えるのか。ビラ、ポスター、看板、幟、さらには新聞広告などによる呼びかけは、小屋の外で繰り広げられるかけひきのための「パフォーマンス」だ。ときにその呼びかけは、興行の内実からかけはなれた宣伝となる場合もあるだろう。たとえば、顔を知られていないのをいかに、有名演者と酷似した名前を掲示して客を誘い込むというやり口がある。

たごを短いエッセイに書いている。昭和一〇年、沼袋付近の新開地にある「汚い寄席」での出来事である。出演者は「九州が生んだ名人米若」や「関西の大御所木村重友」であつた。ただし出身地は小さな「割り注」としてこっそり挿入されていた。本物の米若は新潟県出身であり、重友は神奈川県出身である。つまりこの興行は、当時の有名演者である寿々木米若や木村重友の名を騙る二七者の仕業だつた。三分の一の客は二七者と知つた上で入場しており、あとの三分の二はレコードやトーキーでおなじみ

の重友や米若が聴ける、見られると信じていたのだという。さて二七者の口演はというと、なんと本物そつくりであつた。特に二七重友の節回しは、本物の全盛期を彷彿とさせるものだつたという。正岡は本物であると信じ切つている客たちが多くと記しているのだが、むしろ注目したいのは、二七者であると気づいている客が少なからずいたことである。気づいている客がいるならば、野次がとんで場が混乱してもよさそうなのだ。しかし二七者の実力は、インチキ臭さに気づいていた客の寛容さをひきたすのに充分であつた。二七者とおとなしく聴き入る客とのあいだには、いわば「共犯関係」が成立していたのである。

芸名がならべられて注意が呼びかけられている。龍甲齋虎丸ならぬ龍甲齋虎丸、東家楽燕ならぬ東家楽燕、春野百合子ならぬ春野百合子などなど。酷似する名前のパリエーションが多いのは、吉田奈良丸である。奈良丸、関東奈良丸、奈良一丸などが営業していたという。有名浪曲師の名前を騙る者はあとを絶たなかつた。

有名浪曲師の二七者が、かつては田舎を中心に「活躍」していた。こっそり営業する彼らの人数を、はっきりとつかむことはできないのだが、どうやら一人や二人ではなかつたようである。浪曲界の番付のなかには、本名や写真を入れて、騙されないようにとの注意書きをわざわざ記したのもあつた。また昭和一〇年代のファン雑誌のひょうをみると、二七者の

正岡の経験は、メディアの受容史的な関心から読み解かれるべき出来事である。二七浪曲師の「悪徳商法」は、レコードの普及がなければ成立しえなかつた。レコードは声を複製する、ことには繰り返し聴いて物まねをする聴衆をつくりだした。つまりレコード・ラジオが十分に普及し、なおかつテレビが普及していないという条件のもとで、浪曲師の二七者はこっそりとしかし闊達に活躍できたのだ。ウツとマコトの境界線上に身をゆだねる二七者たちは、世の中が共有するメディア環境、さらには複製をめぐる思想のあり方にその命運を握られている。言説に残りにくい二七者の実践史も、確かに日本芸能史の一部であるといえるだろう。



「随筆 寄席風俗」正岡容著(昭和18年(1943)年刊 三吉書院)

正岡 容著  
筆 隨 寄席風俗

## 見せる

特集 絵空事と遊び心

大日本浪曲 鏡之土藝技

昭和十三年(1940)版「大日本浪曲技藝師之鏡」。年号の上に「偽物防止写真一覧」とあり、その左にインチキ興行への注意が記されている

年参拾和昭 (第二版)

子七世母はへ無慮は真高の雲揚而真

（第一版）

（第二版）

（第三版）

（第四版）

（第五版）

（第六版）

（第七版）

（第八版）

（第九版）

（第十版）

（第十一版）

（第十二版）

（第十三版）

（第十四版）

（第十五版）

（第十六版）

（第十七版）

（第十八版）

（第十九版）

（第二十版）

（第二十一版）

（第二十二版）

（第二十三版）

（第二十四版）

（第二十五版）

（第二十六版）

（第二十七版）

（第二十八版）

（第二十九版）

（第三十版）

（第三十一版）

（第三十二版）

（第三十三版）

（第三十四版）

（第三十五版）

（第三十六版）

（第三十七版）

（第三十八版）

（第三十九版）

（第四十版）

（第四十一版）

（第四十二版）

（第四十三版）

（第四十四版）

（第四十五版）

（第四十六版）

（第四十七版）

（第四十八版）

（第四十九版）

（第五十版）

（第五十一版）

（第五十二版）

（第五十三版）

（第五十四版）

（第五十五版）

（第五十六版）

（第五十七版）

（第五十八版）

（第五十九版）

（第六十版）

（第六十一版）

（第六十二版）

（第六十三版）

（第六十四版）

（第六十五版）

（第六十六版）

（第六十七版）

（第六十八版）

（第六十九版）

（第七十版）

（第七十一版）

（第七十二版）

（第七十三版）

（第七十四版）

（第七十五版）

（第七十六版）

（第七十七版）

（第七十八版）

（第七十九版）

（第八十版）

（第八十一版）

（第八十二版）

（第八十三版）

（第八十四版）

（第八十五版）

（第八十六版）

（第八十七版）

（第八十八版）

（第八十九版）

（第九十版）

（第九十一版）

（第九十二版）

（第九十三版）

（第九十四版）

（第九十五版）

（第九十六版）

（第九十七版）

（第九十八版）

（第九十九版）

（第一百版）

# ミュージアムと

## ITの

# いい関係



高田浩二 (たかたこうじ)  
海の中道海洋生物科学館館長  
国立民族学博物館客員教授

ミュージアムで人命のこもった実物の魅力にふれ、  
圧倒された経験を思い出そう。  
しかし、ミュージアムはあまりに遠い。  
いや、ちよつと待てよ、ITを活用してみよう。  
ほら、ミュージアムがすぐそこまで来ている！

### 博物館は一生に一度行く？

かつて、「動物園は一生に三度、博物館は一度行く」と言われた。つまり、動物園では、初回は幼児の時に

### 博物館の情報力

私は博物館を「学術的資料を収集・展示し、その情報を発信する施設」と考えている。博物館がおこなう情報発信は、人に「感動」と「知的理解」を与えることを目的とし、「教育」の役割を担っている。博物館は「教育の機能をもった施設」であり、博物館の職員は「教育にも貢献できる人材」と位置づけられよう。

博物館の情報伝達の役割は、館の利用者に対してだけでなく、展示されている資料に対する責任を果たすことでもある。これは特に、海の中道海洋生物科学館のような水族館の場合は、命をもった生物に対する礼として重要である。飼育環境に置かれた



ISDN回線を活用した有線の遠隔授業。テレビモニターで教室の子どもと交流できる



PDAを操作して生物の情報を入手する子どもたち

いう言葉さえあるようだ。一生に一度は、ちよつと極端なたとえだろうが、はたして、博物館はこれほどまでに、印象が薄く魅力に欠ける施設だったのだろうか。

また一般に、「博物館とはどんな施設か？」と問いかけると、多くの人は「歴史的な作品や学術資料を閲覧する場所」と回答するが、そのなかに「学びの場」や「教育の場」という言葉はなかなか得ることができない。これらの原因は、一般の方の博物

の手段を持つことが館の特色になり、その「情報力」で館の資質が評価される時代になるだろう。

これまで、博物館の外部への情報発信として、機関紙の配布などがあつた。また、館内においては解説板が中心であり、これらは、情報量や広報の範囲、効果などの面で十分ではないのが実情であつた。今日、博物館の情報発信を必要としているのは来館者だけではない。これからは、学校、家庭、福祉施設、社会教育施設など、積極的に外部へと発信したい。その発信の方法として、近年の情報技術（IT）の発達により、テキスト、写真、動画などを、WebやCD-ROMによつて提供したり、高速の通信回線を活用して、映像と音声による遠隔授業を実施することもおこなわれるようになった。また情報を一方的に流すのではなく、Eメール、Web会議室、メーリングリスト、掲示板などの機能を使つての交流も可能である。このように、IT機器やインターネットは、コミュニケーションの道具としても情報発信に大きく寄与し、市民からの信頼を得るようになった。

### 近未来の学習シーン

一方、学校の教育現場でも情報化は急ピッチで進んでいる。二〇〇二年

館への意識が低いからではない。博物館側に入館者に提供するものは何か、その提供手段はマンネリ化してないか、体質や運営システムが古くないか、などの自己検証と改革への努力が、不足していたことが最大の要因ではないか。これらを打破していくには、多方面のチャネルとつながる情報ネットワークをもち、多くの情報をさらに多くの手段で、積極的かつ攻撃的に発信する施設として博物館を変革していかなければならない。

三月には全国の学校にインターネットが整備された。また二〇〇五年度までには各教室に二台のコンピュータと高速回線が整備されることになっており、教育現場でのIT環境の充実には目を見張るものがある。また二〇〇四年四月から新教育課程がスタートしたが、このなかでも情報教育をひとつの大きな教育目標として位置づけ、子どもたちの情報活用能力の向上を図るための、教材や教育プログラムの開発が進んでいる。このように学校では、インフラとしての情報化が進んでいるが、教育の現場は、何からどう始めたらいいのか、とこと情報交流したらいいのかなど、実践の部分ではまだ模索の状態である。このようななか、博物館のもつている専門的な情報を学校へ提供できる環境を整えることで、博物館が学校に寄与できるチャンスが増加している。

文部科学省は、平成一四年度から始めた「総合的な学習の時間」に、博物館の活用を推奨するようにになった。博物館には、地域の歴史や暮らし、産業、自然等についての調査、研究資料がたくさん蓄積され、専門的な知識や技術をもった職員が配属されるなど、地域教材の開発という点で大きな魅力がある。この点で見ても、博物館は「総合的な学習の時間」に

役立つ社会教育施設のひとつといえる。

一方で、学校にも博物館にも、子どもたちの教育には、「実物に触れる」ことを一義として、実物教育こそが教育の基本であるとする考え方が根強い。確かに、実物の持つ魅力は大きく、そこから得られる感動や教育的な効果にも手応えを感じる。しかし、実物に触れる学習の機会が、すべての生徒に平等に与えることができるであろうか。身近に、実物や博物館がない子どもたちは実物教育のチャンスすら与えられない。さらに、破損、消耗などのリスクを背負っている博物館の実物資料は、何万人もの子どもたちに、同じように提供することは不可能である。もはや、実物教育には限界があるといつていいだろう。

そこで、そのような、実物教育の弱点を補うのが、情報教育と考えるはどうだろうか。特にIT技術を活用した情報発信や交流は、すばやく、平等に、繰り返し、消耗なく資料の活用が可能である。さらに、実物を見たり、さわったりするだけではわかりにくい事象や、特別な映像や他の資料との比較を効果的に提示できる。しかもそこに学芸員が、テレビ電話などで登場して、個別に質問に答えたりしてくれば、情報教育が学校にとつて、なくてはならない存在となる

ことは間違いなさだろう。しかも、ユビキタスと呼ばれる時代の到来で、子どもたちは、いつどこにいても、簡単に情報ネットワークに入っている環境が整備されつつある。情報教育はそんな、近未来の学習シーンを提供するところがあるのである。

### デジタル教材による 学校教育との連携

海の中道海洋生態科学館では、一般社会や学校の情報化にあわせて、さまざまなIT機器やインターネット環境、WebやCD-ROMなどのデジタル教材を開発し、特に、学校教育との連携を積極的に推進してきた。以下に、その実施例を紹介する。

#### テレビ電話による遠隔授業

二〇〇〇年よりISDNの電話回線を使い、テレビ電話システムによつて、



①携帯電話を利用した遠隔授業。ノートパソコン、USBカメラ、ヘッドマイクだけで実施可能



②PDAに、水族館の取材システムをインストールし、LAN経由で生物や施設の情報を入力する



③3つの動物園水族館の獣医師、飼育係、学芸員がWebに動画で登場



④パソコンのなかにつくった博物館の建築やデザイン作品を各自が共有確認できる

博物館と学校を映像と音声で結んで交流する遠隔授業を実施した。また、遠隔授業をおこなうために、機材整備や講習会、授業の案内をするWebサイトの制作・公開、各博物館の教育プログラムや学習素材を収録したCD-ROM教材の作成・配布、指導案やワークシートをひとつにパッケージ化したプログラム集「学習パッケージ」の作成とWebサイトでの公開、遠隔授業で活用する実物資料を梱包した「デイスカバリボックス」の制作などをおこなった。また近年は、新しい通信環境として、テレビ電話機能のある携帯電話を使つて、より簡易で機能的な遠隔授業へと発展させている。(写真①)

#### 携帯情報端末(PDA)を使った学習

児童一人に一台のPDAを配布し、新聞作成のための取材手帳として、

学芸員の指導のもとで、施設や展示生物の情報を、PDAの中に、館内に設置した無線LAN経由で入手したり、各自が文字入力したりする活動をおこなった。本学習では、小学校五年生以上を対象に、おもに「総合的な学習の時間」で二時間以上の授業として組み立てた。授業の全体構成は、(一)PDAの入力法の指導、(二)新聞制作の意義や目的を学ぶ動機付け学習、(三)新聞の機能や役割、新聞記者の仕事や学芸員の出張講演、(四)水族館でのPDA活用、(五)教室での編集作業とした。(写真②)

#### 「みんなで探検 水族館動物園」

二〇〇三年度、福岡市内の三つの動物園・水族館(福岡市動物園、海の中道動物の森、海の中道海洋生態科学館)が連携しておこなったプロ

グラムである。この事業では、各施設で働く、飼育技師、学芸員、獣医師をモデルにし、この職員による学校への出張授業、来館(園)時の案内をおこない、さらにインタビュ形式で、仕事への情熱、生き物への思い、生命観などを語ってもらった動画をWebで公開し、生徒たちがその動画をパソコンで閲覧するなど、いろんな場所や方法で、職員に何度も出会うきっかけをつくり、人をとおして、生き物の命や自然環境を守ることの大切さを学んだ。これにより、水族館・動物園にある資料だけでなく、そこで働く人や仕事も、学習素材にすることが可能であることが確認された。(写真③)

#### 「博物館の建築とデザインから学ぶ社会教育」

文部科学省の二〇〇四年度「社会教育活性化二世紀プラン」において、九州産業大学美術館、九州国立博物館、および、福岡市内の二つの高等学校と連携し、博物館の建築やデザインから、博物館の機能や役割を学ぶという学習プログラムを構築し、一年間にわたる長期的な学習をおこなった。博多工業高校建築科では河川ミュージアムの設計プランを、九州高校デザイン科では、海の中道海洋生

態科学館の展示演出改造プランの提案をおこなった。これらの学習において、生徒、教員、博物館職員がパソコンのなかで共有できる作業掲示板を設け、学習の進捗の確認や意見交換、振り返り学習などに活用した。また、全国の博物館の建築やデザインに関するWebのデータベースを作成し、一般への公開だけでなく、高等学校での学習でも活用した。(写真④)

#### 情報を生かす人のネットワーク

博物館の情報化とは、展示や解説を充実させるだけでなく、情報の教材化によつて学校教育や生涯教育に貢献することもある。また、蓄積されている資料をデータ化して共有することにより、博物館同士で有効活用できるメリットも大きい。情報のネットワーク化は、博物館や教育の世界に大きな変革をもたらす。このためには、人や組織のネットワーク作りも欠かせない。人のネットワークとは、情報を活用する学校や一般市民と博物館の人と人をつなげるネットワークである。情報のネットワークと人のネットワークの両輪がうまく運営されてこそ、真の意味でのネットワークが構築され、両者が活性化し発展するであろう。

### 表紙モノ語り

## コートジボアールのカフェ

企画展示「アフリカのストリートアート展」出展作品 幅/410cm 奥行/230cm 高さ/260cm

### 川口 幸也

文化資源研究センター



コートジボアール第一の都市アビジャンは、西アフリカの経済、文化の一大中心である。はじめてこの街を訪れる者は、ブラト(高台)と呼ばれる都心一帯のあまりのモダンなたたずまいに面食らうに違いない。モダンというよりも、前衛的といったほうがふさわしい奇抜なデザインのパブが立ち並び、その間をハイウェイが縫うように走る様は、さながら手塚治虫描くところの未来都市だ。たしにビルひとつひとつをみると、空調のきいたカフェで、洒落たスーツに身を包んだ地元のエジネスマンが、ハイネケンを片手に談笑していたりする。ブラトがアビジャンのよき行きの姿だとしたら、ラグーンを挟んで対岸に位置するトレンシビルは、さしずめ階段のアビジャンだ。そこには、何でも売っている

活気に満ち溢れた大きな市場があり、多種多様なレストランや安宿もある。基盤の目状に張り巡らされた路地では、屋台が軒を並べ、物売りが大声で客を呼び込んでいる。もちろんヤミの両替屋や売春婦など、怪しげな手合いも事欠かない。走り抜けるクルマの排気音とけたたましいクラクションは、おなじみアフリカの都市の効果音だ。そうした庶民の生活の臭いが濃厚にたちこめるこの地区の憩いの場のひとつが、たとえば表紙の写真にあるカフェである。一見粗末なベニヤ板造りだが、なかにはガスコンロもあって、簡単な料理ならOKだ。壁に貼られたメニューによれば、牛ステーキとレヴァーは八〇セファ(約一六〇円)、ケチャップで炒めただけのスパゲッティ、それにオムレツが三〇〇セファ(約六〇円)、飲み物は紅茶が一五〇セファ(約三〇円)と値段は決して安くはない。ビールは地場銘柄が売れ筋だ。

夜のとはりが降りるころ、スーツではなく、Tシャツにサンダル履きの人びとが三々五々集まってくる。ここでは、この日彼れを癒していく。ちなみに、店の名前の「Le Silex」とはフランス語で火打ち石の意。二〇〇三年まで実際にトレンシビルの一隅で営業をしていたカフェである。

未来へひろく  
ミュージアム

# 一本の旗——アチエからのメッセージ

山本 博之 (やまもと ひろゆき)  
地域研究企画交流センター



津波から1か月半後のウレレー海岸。右手前方に旗が立てられている

**津** 波から一か月半が経ったインドネシアのアチエ州を訪れた。スマトラ島の北西端にあるウレレー海岸では、津波ですべての建物が流された跡に旗が一本立てられていた。  
かつてアチエは、世界各地の人や物が出入りするところで栄える土地だった。しかし、およそ一〇〇年前にこの地域に国境と領域支配の概念がもちこまれて以来、アチエは世界との自由

な交流が断たれ、かつてアチエを特徴づけていた外部社会とのつながりという「アチエらしさ」が発揮できない状態が続いてきた。今回、未曾有の被害を出した津波にわずかなりとも救いを見出すとしたら、世界中の人びとの関心をアチエに向けさせ、アチエの人びとを再び世界とつなぐ契機を与えたことだといえるだろうか。  
州都バンタアチエを歩いて、尋ね人の貼り紙をよく見かけた。多くは顔写真入りの白黒コピーの簡単なものだ。あちこちに貼られていたが、市場のように地元の人びとが集まる場所より、災害対策本部や空港で目立った。これらはいずれも外国人が集まる場所だ。世界の人びととつながりたくても発信する手段をもたない人びとは、外国人が集まる場所に自分のもつている情報を貼り出すことで世界に発信しているということがある。

**ウ** レレー海岸は、津波の被害が大きく、バンタアチエにきた人びとがまず訪れる場所のひとつだ。そこに旗を立てるのも、訪れる人びとを通じて世界になにか伝えたいという気持ちのあらわれなのだろう。旗を見てなにを讀みとるか人はそれぞれだろうが、わたしには、ここに生き



家の残骸。壁には「この家のもち主はまだ生きている」とある



災害対策本部の門柱に貼られていた尋ね人の貼り紙

ている人がいるのだというメッセージが感じられた。想像を絶する規模の津波に遭いながらも生き延びているのだという人間の生命力そのものだ。被災地から世界全体に向けた「希望を失うな」という呼びかけだといつても過言ではあるまい。  
なにもかも失った人びとが、それでも自らの存在をうたえたいと思ひ、瓦礫のなかで見つけたのが旗だったのだ。その旗がインドネシアの国旗なのか、それとも別の旗なのかというのは野暮な質問だろう。アチエの人びとは、自分たちのもてるものを最大に利用して、外の世界と通じるといふ「アチエらしさ」を取り戻そうとし、それによって被災を乗り越えようとしている。  
今日二六日は津波から六か月を迎える。その後、何度か大きな地震が起こったが、最近テレビや新聞でアチエの様子を見聞きすることはあまりなくなってきた。外部世界とのつながりを求めてアチエから発信されているメッセージは、わたしたちにも届いているだろうか。

## 新年への希望をこめて

中国や台湾では新年の開始は旧暦にもとづく旧正月にしたがうのが一般的である。旧正月の新年は春節とよばれ、二〇〇五年は二月九日であった。春節の前は日本の暮れのように新年を迎える準備に忙しくなるのが中国や台湾の慣わしである。

新年を迎える準備のひとつに春聯の取替えがある。中国の一般的な家庭では、門や玄関の扉の左右と上部の三カ所に、対聯とよばれる紅色の細長い紙が貼られている。対聯にはおめでたい言葉が書かれ、その家の人びとの思いや願い、そのときの家族の状況があらわされる。道行く人びとは対聯を見ることによってその家が結婚した人がいたとか、昔ならば、科擧の試験に誰かが合格したとかいうことを知ることができた。対聯のなかでも新年にあらたに貼られるものを

## 人生は決まり文句で

豚は中国人にとって、身近で大切な家畜



# 六畜興旺 (リューツーシンワン)

野林 厚志 (のばやし あつし)  
文化資源研究センター

新年を前にして、一家の主はあらたな春聯を精理こめて書き上げる。その片手間に時々書いてしまうものに家畜小屋の扉に貼り付ける門紙がある。これは毎年、貼りかえるほどのものでもなく、いたって地味な感じで家畜の住まいに貼り付けられている。とはいっても、人間と動物との関係を研究テーマにしている筆者にとつてはとても気になるのである。  
この門紙には多くの場合、「六畜興旺」という決まり文句が書かれる。六つの家畜が元気に



牛小屋。牛は大武と表現されることも多い



六畜興旺の門紙

春聯とよぶ。最近では都心のスーパーやデパート、村の定期市で印刷された春聯や対聯が売られている。春節が近くなると赤地に金字で印刷された春聯が店先にぶら下げられる光景も珍しくなくなってきた。とはいっても、まだまだ春聯を自分の手で書く人は多い。多くの場合、一家の主が春節を前にして、次の年への希望をこめて墨筆で成句や自ら考えた文言を紅色の紙にしたためていくのである。

育ちますよという意味である。中国では代表的な家畜のことを「六畜」と表現し、その言葉の由来はかなり古くまで遡るとされている。「六畜興旺」という言葉のほかにも同じような決まり文句として、「六畜成群」や「大武興旺」という言葉もよく見かける。前者は家畜が群れをなすぐらいたくさん育ちますよということ、後者が込められている。後者は牛小屋に書かれていることが多い。家畜のなかでもっとも大きな牛は大武と表現され、立派に育つよということの意味が言葉が門紙に書かれているのである。

一般的に六畜とは豚、牛、羊(山羊)、犬、馬、鶏である。しかしながら、実際に家畜を育てている人たちに「六畜はなに?」とたずねると、兎がはいついたり、アヒルを含めたりと、身近な動物が六畜に仲間入りすることも少なくない。広大な中国では、それぞれの地域で身近に養われる家畜も異なっている。それぞれの生活のなかで大切に育てられる動物たちのことを人びとは自分たちの六畜と考え、家族の幸福と繁栄を春聯で願い、家畜もともに豊かに暮らせることを「六畜興旺」という言葉で願うのである。



# モンゴル文字で名前を書く

1

藤井麻湖 (ふじい まほ)  
愛知淑徳大学講師

現在、モンゴル文字は主として中国の内蒙古自治区で用いられている。モンゴル国やその他のモンゴル人の居住する地域では、特別な出版物を除いて通常キリル文字が使われている。

チンギス・ハーンは、ナイマン部を滅ぼしたときに捕らえたウイグル人宰相タトungaに命じ、モンゴルの諸王にウイグル文字でモンゴル語を書くことを教えさせた。これがモンゴル文字の始まりである。この文字は縦書きで、左から右に向かって書かれる。

モンゴル文字は子音と母音を区別する文字なので、日本語のひとひらの文字をモンゴル語で書く場合、ヘボン式ローマ字表記のように、子音と母音を組み合わせる。基本になる五母音と子音の字形をアスタールすればいいことになる。だが、モンゴル文字の場合、ヘボン式ローマ字表記よりも、やや複雑である。というのも、モンゴル文字の母音やいくつかの子音は語の最初、中間、末尾のどこに位置するかによって字形が変化するからである。それぞれの字体を語頭形、語中形、語末形とよんでいる。基本になる五母音の字体を示すと図②による。「あ」の語末形が二種類あるが、これは直前の文字により書き分けられる。

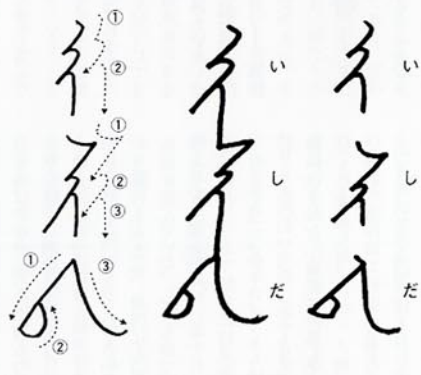
図① モンゴル文字による50音図例

ば行	び行	だ行	ぢ行	が行	わ.ん	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	
pa	ba	da	za	ga	wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a	ア段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ	ᠳᠠ	ᠵᠠ	ᠭᠠ	ᠠ	ᠷᠠ	ᠶᠠ	ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠲᠠ	ᠰᠠ	ᠬᠠ	ᠠ	a
pi	bi		ji	gi		ri		mi	hi	ni	chi	shi	ki	i	イ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ		ᠵᠠ	ᠭᠠ		ᠷᠠ		ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠴᠢ	ᠰᠢ	ᠬᠢ	ᠢ	i
pu	bu		zu	gu	wo	ru	yu	mu	fu	nu	tsu	su	ku	u	ウ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ		ᠵᠠ	ᠭᠠ	ᠠᠤ	ᠷᠠ	ᠶᠠ	ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠴᠢ	ᠰᠢ	ᠬᠢ	ᠤ	u
pe	be	de	ze	ge		re		me	he	ne	te	se	ke	e	エ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ	ᠳᠠ	ᠵᠠ	ᠭᠠ		ᠷᠠ		ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠲᠠ	ᠰᠠ	ᠬᠠ	ᠡ	e
po	bo	do	zo	go	語中形	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o	オ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ	ᠳᠠ	ᠵᠠ	ᠭᠠ	ᠠ	ᠷᠠ	ᠶᠠ	ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠲᠠ	ᠰᠠ	ᠬᠠ	ᠣ	o
びゃ行	びゃ行		じゃ行	じゃ行		りゃ行		みゃ行	ひゃ行	にゃ行	ちゃ行	しゃ行	きゃ行		
pia	bia		jia	gia		ria		mia	hia	nia	chia	sia	kia		ア段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ		ᠵᠠ	ᠭᠠ		ᠷᠠ		ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠴᠢ	ᠰᠢ	ᠬᠢ		a
piu	biu		jiu	giu		riu		miu	hiu	niu	chiu	siu	kiu		ウ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ		ᠵᠠ	ᠭᠠ		ᠷᠠ		ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠴᠢ	ᠰᠢ	ᠬᠢ		u
pio	bio		jio	gio		rio		mio	hio	nio	chio	sio	kio		オ段
ᠪ᠎ᠠ	ᠪ᠎ᠠ		ᠵᠠ	ᠭᠠ		ᠷᠠ		ᠮᠠ	ᠬᠠ	ᠨᠠ	ᠴᠢ	ᠰᠢ	ᠬᠢ		o

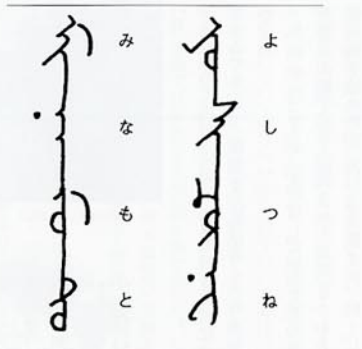
図② 日本語の5母音の語頭・語中・語末形例

お	え	う	い	あ	
ᠣ	ᠡ	ᠠ	ᠢ	ᠡ	語頭形
ᠣ	ᠡ	ᠠ	ᠢ	ᠡ	語中形
ᠣ	ᠡ	ᠠ	ᠢ	ᠡ	語末形

図③-1 日本語の名前の表記例 石田



図③-2 源義経

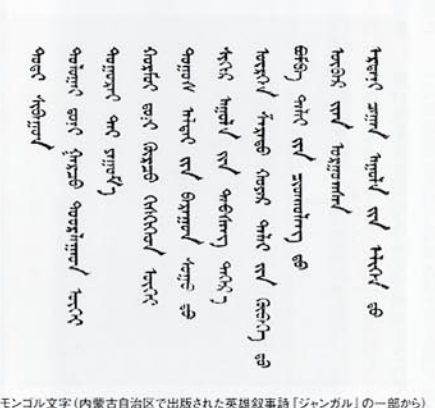


子音のほうは、一部を除いて語中の位置によって変化しない。日本語では子音だけを発音することはないので、子音と母音を一緒にした「モンゴル文字による五〇音図例」を①に挙げておく。ただし、紙幅の都合により語頭形のみを記した。また、日本語でもモンゴル語でも「ん」で始まる単語がないので、図①では「ん」の語中形を示しておく。注意が必要なのは、たとえば「かきくけこ」が語頭にきても、モンゴル文字では、子音に接続する母音の形は語頭形ではなく、語中形になることである。

それでは以上を踏まえて、「石田」という姓をモンゴル文字で書いてみよう(図③-1)。最初の母音「い」は語頭形なので、「イ」は語中形なので図①にはないが、じつは語中形は語頭形と同じことが多く、この「し」の場合も語頭形と同じく、「イ」とつなげて書く。最後の「だ」は語末形であるから、これは図①の語頭形の「ᠳ」ではなく、子音dの形「ᠳ」に図②の「あ」の語末形「ᠡ」を接合させた「ᠳᠡ」を書く。

同じように、図①と図②をみながら「源義経」を書いてみよう(図③-2)。義経といえは、室町時代ころから各種の伝説がつけられてきたが、なかでも有名なのは義経とチンギス・ハーン説である。これ

は小矢部全一郎著「成吉思汗ハ源義経也」(一九二四年)により流布したものと考えられる。歴史家によると、この元本は、イギリスのケンブリッジ大学に留学していた末松謙澄(一八七九年)という後の通信大臣・内大臣が、日本人への差別的な待遇に反発し、イギリス人を装い匿名で書いた論文という。ヨーロッパと対峙するためには、義経ではなく、チンギス・ハーンが必要だったというわけである。



モンゴル文字(内蒙古自治区で出版された英雄叙事詩「ジャンガル」の一部から)

# ルーロットの出会い

大森 康宏（おもりやすひろ）  
民族文化研究部



ペリー地方のサンゴッティエ



## マドマゼル ボラトン

今年二〇〇五年三月三日、フランスのペリー地方に流れるクルーズ川沿いの小さな町サンゴッティエにある菓屋の女主人、ボラトン婦人が他界した。このマドマゼルこそ、移動民ジブシーのひとつの部族マヌーシユを生涯に渡って支援してきた人物であった。また彼女は民博のヨーロッパ展示場の農機具やブドウの蒸留釜、家庭用品や衣装などの収集にも尽力をしてくれた。享年九〇歳であった。



移動民マヌーシユを支援した  
マドマゼル ボラトン

彼女はマヌーシユの家族手当や保険手続き、養育費の申請そして家族全体の移動証明書などの手続きをはじめ、国に対してマヌーシユの移動規制緩和の要請などの支援をしていた。なかでも家馬車ルーロットの生活者に対しては、その厳しい生活条件を棄てず、そのための援助と支援を惜しまなかった。事故や事件に巻き込まれたマヌーシユの法的措置に対して的確に対処するのもボラトン婦人であった。

彼女に初めて会ったのは一九七八年の初夏であった。パリからオルレアンの移動民マヌーシユを支援したマドマゼル ボラトン

## 馬糞を手がかりに追跡

一九世紀の終わりに、イギリスでワゴンタイプの馬車が使われ始めた。それが海を渡ってフランスのブリュターニ地方に伝わった家式の馬車ルーロットである。ルーロットで生活するマヌーシユ

洋からの来訪者を見つめていた。観音開きの扉の陰には、左右に小作りの戸棚があり、その左奥にタルマ式のストーブが置かれている。一番奥には高さ七〇センチメートルほどのセミダブルベッドが横にしつらえてあり、富の象徴である豪華な花模様羽根布団がうすたかく積まれている。ベッドの下は、若い娘たちが寝るところである。装飾に使われる布地は、色彩豊かで遠い祖先の出生地であるインドの雰囲気をかもしだしている。床下には、車軸との間に柳の枝束がおかれ、籠作りの素材となる。ひとしきり話を聞いて、レイナー家の家系であるルーロットと別れた。

このち彼らが信仰する福音派の大会にて、デユビル一家の大ルーロット集団に出会う。その長老デューイ翁は、風貌と人格ともにマヌーシユの人生を映像で語るにふさわしい人物であった。



日本に搬送されるルーロット

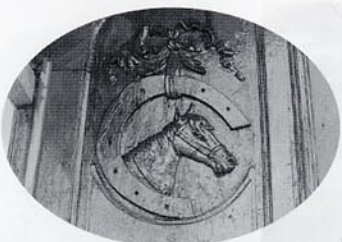
のちの調査の結果、ルーロットの生活時間に関する割合が明確に決められていることが判明した。ルーロットは一日のうち睡眠時間以外、洋服の着替え、雨宿り、ちょっとした休憩に使用されるだけである。冬でも食事は外で個人単位になされている。

## そして民博へ

ルーロットは本来、もち主が死亡すると焼却するものだが、ボラトン婦人はこうしたルーロットを三百台、知人の保管倉庫にもついでたのである。そのうちの一台を民博が購入した。ペリー地方を移動しているマヌーシユのロパン家のものであった。扉の両側に彫刻された馬の頭は、彼らの移動手段である馬への敬意を象徴している。

ボラトン婦人も「私の人生・ジブシー マヌーシユ」のなかに登場している。彼女のジブシーとの交流についてのさわやかな語り口の部分は、定住型のフランス人にとって印象深いものであった。一九七七年の民博開館以来ルーロットはヨーロッパ展示場では異色な大型展示物であった。しかし二世紀に入つて新しい展示構想が実施されて、この大型展示物は引退して倉庫に取められた。

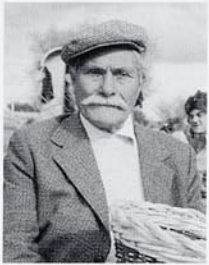
同じようにマヌーシユの人生を記録した映画は、ボラトン婦人が他界して二日目の三月二五日に、日本の国立近代美術館のフィルムライブラリーにて上映されたのち、その微笑とともに、国の保管取蔵庫に取められることとなった。



扉に刻まれたシンボル、馬の頭部の像



街中をいく家馬車ルーロット



マヌーシユの長老、ディューイ翁

# マガール 民族楽器のいのち

## カイジャリの響き

深夜、浅い眠りから覚めると、「タツ・タラー、タツ・タラー」という乾いた太鼓の音が遠くから聞こえてくる。今日もどこかの村で歌垣をやっているなと思いつつ、私はまたうつらうつらと眠りにつく。

こゝは、ネパールのマガールという人びとが暮らす山村である。このあたりでは、未婚の女性たちが隣村の男性を招いて、歌い、踊り、飲み明かす歌垣がしばしば催される。そこでは、マガール語でゴホロと呼ばれるベンガルオオトカゲの皮を張った片面太鼓、カイジャリが用いられる。遠くの村から歌声までは聞こえてこない。だが、カイジャリの音は谷や尾根を越えて寝静まった村むらにとどく。

カイジャリの演奏はマガール人男性のたしなみのひとつであり、未婚の男性はほぼ全員、自分の太鼓をもつ。彼らは手の平と指を使い分けてそれを叩くことで、さまざまな音を生み出す。冒頭の「タツ・タラー、タツ・タラー」もそうだが、ほかにも「トゥク・トゥナ・トゥーン」といったよ

うに、人びとは音の違いとリズムを口真似で覚え、伝えてきた。カイジャリ独特のこうした乾いた、はじけるような音は、ベンガルオオトカゲの皮でなければ出ないといわれている。マガールの人びとはこの音色を愛してやまない。だから、ネパールの他の地域で見られる、ヤギの皮を張った片面太鼓(タンフー)にはまったく関心を示さない。

## トカゲと人びとの来し方行く末

カイジャリにはベンガルオオトカゲの胴部分の皮が使われる。そのため、捕まえるときには皮を傷つけないように鉄砲を使わない。また、それだけを探しにわざわざ狩猟に出かけることはない。偶然見つけたら、<sup>一</sup>遮二無二追いかけて尻尾を捕まえ、棒で頭部を殴って捕獲するのだ。私が一九八七年に譲ってもらったカイジャリは、胴面の直径が二七センチメートルある。つまり、それは胴回りが三〇センチメートルくらいあるベンガルオオトカゲから作られていることに

## 南真木人

(みなみまきと)

民族社会研究部

もつとも、最近の若者が使うカイジャリは明らかに直径が小さくなってきている。それは近年、ベンガルオオトカゲの生息数が減少し、大型のものが少なくなってきたためであろう。そもそも私は、いまだかつて森でこの動物に出くわしたことがないのだ。それでも、細々と生息していることは間違いない。捕獲された瀕死の状態のそれや、軒下に干された皮をこくまれに見かけるからである。

この地域のマガール人男性をマガール人足らしめてきた、カイジャリ演奏という伝統と、そのためにだけ捕獲されてきたベンガルオオトカゲ。はたしてどちらが先に、変化ないし絶滅してしまうのであろう。ベンガルオオトカゲの行く末は、月明かりのもと歌垣に興する男女の情景や、その響きを子守唄のように聞いて育つマガール人の子どもの将来に大きくかかわっているのである。



カイジャリ製作用に干してあったベンガルオオトカゲの皮



なる。黒い斑点がある美しい皮は、一五本の木の釘で、ろくろを挽きで作った木製の太鼓の胴にビーンと張られている。

頭部を殴られ瀕死状態のベンガルオオトカゲ



村内の未婚男女がおこなうカジュアルな歌垣



歌垣の休憩のあいだに子どもがカイジャリ叩きの練習をはじめ



カイジャリを叩き、歌うマガール人男性

## ベンガルオオトカゲ

(学名: *Varanus bengalensis bengalensis* Daudin 1802)

オオトカゲ科オオトカゲ属のひとつの種。同じ属にはコモドオオトカゲなど31種がある。ベンガルを冠するがその生息域はイランから東南アジアの大陸・島嶼部に広がる。体長は約1~1.5メートルに達し、体重は2~3キログラムになる。主にカブトムシ、カタツムリ、アリなどの昆虫を食べる。ワシントン条約の付属書Iに載っており、今すでに絶滅する危険性がある生き物として、商業のための輸出入が禁止されている。



タイの手作りトラック「イタン」。農業用の汎用エンジンを使って駆動する。村の修理工場では、職人たちが独学で身につけたイタン作りをおこなっている



春は耕起のシーズンである。耕起に使うこの耕転機もタイの職人たちが発明した



水田地帯を抜ける道。イタンや耕転機は毎日この道を通って農場と村を行き来する

## トラックを手作り!?

タイで生活しているといろいろと驚かされる。辛い食事や仏教など、タイならではの「カルチャーショック」は、もう日本でもおなじみだろう。だが、住んでみてはくがなによりも驚いたのは、タイの村には、トラックを手作りしている人たちがいることだ。東北タイのコラート県とその周辺の農村には、スクラップ部品を集めて「イタ

ン」と呼ばれる小型トラックを手作りしている人が数多い。

タイの技術や機械に関心をもつ人は少ない。そもそも発展途上国の技術に注目すること自体、きわめてめずらしい。だが、この手作りトラック、これまでまじめな研究ではあまり触れられることがなかったが、タイ社会を考えると、それは貴重かつ格好の手がかりなのだ。イタンとそれを作った人々を追いかけてみると、タイ

で簡単に入手できる。こうしたスクラップ部品から生まれてきたのがイタンなのだ。誰がイタンを最初に発明したかは今はわからない。イタンはともかくも基本的には同じデザインで、鉄骨で作ったフレームに中古部品を組み立てたトランスミッションやサスペンションを取り付けて、エンジンは取り外し可能な農業用のエンジンを使う。価格が安く、農用ディーゼルエンジンを使うため燃費がよく、さらにエンジンを取り外して、ポンプや発電機などに転用できるので、農民たちには根強い人気を誇っている。

日本ではこのネットワークはメーカーや販売店が提供している。だが、町から遠く離れたタイの農村にまで及ばない。都市部でさえ、企業によるアフターサービスが広範囲に届き始めたのは比較的最近のことなのだ。タイの職人と彼らの驚くべき修理技術は、このような機械たちを「生かし続ける」ために発達してきた。町から離れた村の、手に入る部品も限られた状況のなかで、彼らはスクラップを利用したり、機械自体に改造を加えたりしながら、機械が動き続けるように工夫を重ね続けてきた。

そうしたなか、手先が器用な人や機械好きの人たちが、農業のかたわらに修理工場を営むようになってきた。彼らは都市部の中華系の労働者や企業家と結びつきながら、次第にタイ独特の職人集団を形成するようになった。先ほど触れた徒弟制度がこうした職人集団の結束の柱である。

## 転用も改造も自在の心地よさ

イタンは、タイの職人たちのこうした歴史を反映した機械である。タイでは、正規の修理部品が手に入りにくいこともあって、スクラップから取り外したジャンク部品を大量に修理に使った。タイではこのためにわざわざ日本から大量のスクラップを輸入しており、今ではたいがいこの

おもに中古部品から組み立てられるイタンの工程は、修理工であれば、普段の修理作業で慣れ親しんでいるものである。そのうえ、現在では電話一本でイタン用の中古部品セットをバンコクから村まで送ってくれる業者までいる。そのため、イタン作りはコラートやその周辺の農村で広くおこなわれている。

# 手作りトラック から見る タイ社会



おける職業のあり方とライフスタイル、人とモノの関係が見えてくる。イタンを作っている人たちは、たいいてい農業のかたわら軒先で小さな修理工場を開いている職人である。彼らのなかには都市の工場でしばらく働いたあと、村に帰ってきた人も多い。タイの地方都市や幹線道路沿いには、いたるところに小さな修理工場や鉄工所がある。路肩に店を開いたいわば「修理の屋台」といった最小の店から、長屋の一角に店を開いた家電の修理工場まで。町には零細な修理業者があふれており、なにかが壊れても直してくれる人を探すのには苦労しない。そのため、タイでは五〇年前のトラックや古い家電など驚くほど古い機械が直されながら使われ続けている。

さらに驚くことに、こうした修理工のなかには学校で技術を学んだ人はほとんどいない。彼らはいいて小学校か中学校を卒業した後、街角の工場に徒弟として預けられて、実地で仕事を学んできた。いわば徒弟上がりである。

こうした職人たちを追いかけていくと、タイの農村生活の思いがけない一面を目にすることになる。戦後の経済成長と八〇年代からの工業化を受けて、農村にはバイク、家電、農業機械、自動車、農用エンジン、カラオケセットなどさまざまな機械類がもたらされてきた。これらのなかには、現地で生産されたものもあれば日本などから輸入された中古品(主に家電、自動車、トラックなど)もある。

## 機械が機械であるために

機械があらちゃんと動いているということの背景には、実はきわめて多様な物事が関係している。機械が機械であり続けるためには、新陳代

見ごろ・  
食べごろ  
人類学

森田 敦郎

(もりた あつろう)

東京大学大学院総合文化研究科



# 人間文化研究機構第2回 公開講演会・シンポジウム 「歩く人文学—人文学と社会の新しい関係—」



主催：人間文化研究機構、大阪大学

**日時**：平成17年6月25日(土) 13:00~17:30 (開場12:30)  
**場所**：グランキューブ大阪 (大阪国際会議場)  
 大阪市北区中之島5-3-51 TEL 06-4803-5555 (代)  
<http://www.gco.co.jp/japanese.html>  
**定員**：500名 (参加無料・申し込み先着順)

現代においては、科学技術、アート、医療、災害、環境問題などの広範な分野で、現場と社会をつなぐ、研究者やインターフェイス的な個人・団体の役割がますます増大している。本シンポジウムでは、新しい人文学による知の創成のために、社会の中の人文学の未来と、人文学が書齋を離れて現場、フィールドで果たす役割について市民とともに考える。

**基調講演** 13:20~14:20

**講演者**：嘉田由紀子 (京都精華大学教授)  
 「制御か共感か? 水害エスノグラフィーの試み」



**参加要領**：FAX、E-mailまたはハガキにより、下記へお申し込みください。その際、受講票をお送りするための「住所・氏名・電話番号」をお知らせくださいますようお願いいたします。  
 ※提供いただきました個人情報については、受講票および今後の案内状送付をおこなうため利用し、本機構が責任をもって管理いたします。

**パネル・ディスカッション** 14:40~17:25

**司会**：鷺田清一 (大阪大学副学長)  
**パネリスト**：猪木武徳 (国際日本文化研究センター教授)  
 「灰色の理論と経験の海」  
 小林傅司 (大阪大学教授)  
 「科学技術に踏み込む人文学」  
 野村雅一 (国立民族学博物館教授)  
 「路上に世界の破片を拾う—大道芸の目線」  
 嘉田由紀子 (京都精華大学教授)

お申し込み・お問い合わせ

人間文化研究機構 事務局総務課 シンポジウム係  
 〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 秀和神谷町ビル2階204号  
 TEL 03-6402-9212 FAX 03-6402-9240 E-mail: [sinpo\\_1@nihu.jp](mailto:sinpo_1@nihu.jp)

月刊



次号予告

7月号 学校がみんぱくと  
 特集 出会ったら

2005年6月号

第30巻第6号通巻333号 2005年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
 電話 06-6876-2151

発行人 大森康宏

編集委員 池谷和信 檜永真佐夫 福岡正太  
 八杉佳穂 (編集長) 山中由里子

編集協力 財団法人 千里文化財団

制作 言葉工房

デザイン 塩見勝則

撮影 桑島秀樹

製版 株式会社吉田プロセス

印刷 株式会社サンコウ美術印刷

■ 本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ  
 ■ 本誌掲載記事の無断転載を禁じます

## 編集後記

現実を模したつくり物を見せて楽しませる。そういう娯楽は、そのときどきのメディア状況に応じて、世界中でずつつくり出されてきた。見る人も、騙されるのがわかっていながら騙されてみる。恋愛にも通じそうな、そういう陶酔を、人類はこの先も追求していくのであろう。

印刷や録音に代表される複製技術が近代以降急速に発展してきたことは、本物とつくり物の関係をすでに変えつつある。CD、DVD、ブランド品をはじめとする海賊版の横行は、本物の生産者の利益と知的財産権を侵害し、国際レベルでの経済的、倫理的議論さえ引き起こしている。複製されたのがモノであるうちは「つくり物を廃棄すべし」ということでもむが、生命になるとどうだろう。クローンでつくられた人間の人權はどうなる？ また、つくり物があふれ、「見せる」装置もあふれる現在の都市状況に目を転じれば、本物よりもつくり物の方が身近で、よりリアルに感じられるという人さえたくさんいるようである。

それはさておき、博物館も近代的で大きなり「見せる」装置のひとつである。ここで見せるのは原則として本物である。しかし、本物がつくり物よりすぐれているとばかりもいえない。どのように社会と向き合い、どのように見せるかを第一にすれば、本物かつくり物かという問題は二の次のような気がする。(檜永真佐夫)